営農タイムリー！

発生予察情報について（5月）

2022年 5月10日発行

病害虫発生予報第3号（5月）

京都府病害虫防除所より、5月の予察情報が発表されました。

病害虫発生予察第3号（5月）（抜粋）

作　物　名	病害虫名	予想発生量 〈平年比（前年比）〉
イ　ネ	ヒメトビウンカ 縞葉枯病 イネミズゾウムシ	並　（並） 並 やや多　（並）
カ　キ	炭疽病	多　（多）
野 菜 類	アブラムシ類	やや多　（やや多）
キャベツ	菌核病	並　（並）
アブラナ科野菜	コナガ	やや多　（多）
ネ　ギ	さび病 ネギハモグリバエ ネギアザミウマ	やや多　（並） やや少　（やや多） やや少　（やや多）

1. イ ネ　イネミズゾウムシ

予報内容　　発生量 ： 平年比やや多い （前年並み）

発生生態及び防除上注意すべき事項

（1）前年の新成虫が越冬し、田植え後、水田に侵入して葉を食害する。5 月中下旬から卵を産む。

（2）ふ化した幼虫は、土中で根を食害する。

（3）イネが根腐れするような水田では幼虫の被害が出やすいので、深水を避け、根を健全に保つ。

（4）浅水管理は成虫の産卵行動を阻害し、産卵場所を制限する効果がある。

（5）**粒剤の育苗箱施用の効果が高い**。なお、イネドロオイムシの常発地では、この方法でイネドロオイムシも合わせて防除ができる。

（6）育苗箱施用をしなかった場合や田植え後発生が多く、成虫が株当たり0.3 頭を越える場合は、そのまま放置すると経済的被害が発生する。

2. カ キ　炭疽病

予報内容　　発生量 ： 平年比多い （ 前年比多い）

発生生態及び防除上注意すべき事項

（1）主として枝の病斑で越冬し、新梢や果実への伝染源となる。

（2）新梢の発病が多いと果実の発病が多くなるので、発病を認めた新梢は速やかに切り取り、園外の土中に埋める等処分する。

（3）5 ～ 6 月に降雨が多いと、新梢や幼果の発病が増える。

3. 野菜類　アブラムシ類

予報内容　　発生量 ： 平年比やや多い （ 前年比やや多い）

発生生態及び防除上注意すべき事項

（1）通常、無翅虫が集団で作物を加害するが、密度が高まると有翅虫が現れて分散し、発生が拡大する。

（2）は種または定植する際には、寒冷紗被覆やシルバーマルチやシルバーテープ等により有翅虫の飛来を防止する。

（3）アブラムシ類には直接吸汁加害するだけでなく、モザイク病を媒介するものもいる。

4. アブラナ科野菜　コナガ

予報内容　　発生量 ： 平年比やや多い （ 前年比多い）

発生生態及び防除上注意すべき事項

（1）高温、乾燥が続くと発生が多くなりやすく、雨が多いと発生が抑制される傾向がある。

（2）年間の発生回数が多く、各発育段階（ 卵、幼虫、蛹、成虫）が混在する。

（3）**防虫ネット等を利用し、物理的防除**に努める。

5．ネ　ギ　　さび病

予報内容　　発生量　：　平年比やや多い（前年並み）

発生生態及び防除上注意すべき事項

（1）春季と秋季に比較的低温で降雨が多いと多発する傾向がある。また、前年の秋に多発して、冬が温暖多雨に経過すると、春に多発する。

（2）肥切れや窒素肥料のやり過ぎは発生を助長するので、適正な肥培管理に努める。

（3）被害葉は伝染源となるので、ほ場周辺に放置せず、適切に処分する。

6．ネ　ギ　　ネギハモグリバエ

予報内容　　発生量　：　平年比やや少ない（前年比やや多い）

発生生態及び防除上注意すべき事項

（1）幼虫が葉肉部分を加害し、白い筋状の食害痕を残す。

（2）産卵から羽化までの発育所要日数は２０℃で約３６日、２５℃で約２３日程度である。

（3）被害葉及び収穫残さが本種の発生源となるので、残さは一箇所にまとめて積み上げ、表面をビニルで被覆する等適切に処分する。

（4）１葉あたり1 ～ 数匹の幼虫が加害するバイオタイプA（従来系統）とは異なり、１０匹以上の幼虫で集中的に加害し、葉を白化させるバイオタイプB（別系統）の発生を確認しているので注意する。

7．ネ　ギ　　ネギアザミウマ

予報内容　　発生量　：　平年比やや少ない（前年比やや多い）

発生生態及び防除上注意すべき事項

（1）年間、１０世代以上くり返し、葉の表層を食害し、かすり状の食害痕を残す。ネギでは葉鞘分岐部や葉折れの内側に多く寄生する。

（2）本種はアイリス黄斑ウイルス（Iris yellow spot virus：IYSV)による病害でネギえそ条斑病を媒介する。

（3）薬剤散布の他、赤色系防虫ネットやUVカットフィルムによる物理的防除が効果的である。

（4）被害葉及び収穫残さが本虫の発生源となるので、残さは一箇所にまとめて積み上げ、表面をビニルで被覆する等適切に処分する。

（5）本種は、殺虫剤感受性低下が懸念されている。殺虫剤散布後は効果を十分に確認し、感受性の低下が疑われる場合は系統の異なる薬剤を散布する。また、感受性の低下を避けるため、系統の異なる殺虫剤をローテーション散布する。

（6）産雄性生殖系統と産雌性生殖系統の殺虫剤感受性は異なるので、産雄性生殖系統が優占している地域（山城及び南丹地域）では注意する。

今後注意すべきその他の病害虫等－Ⅰ

イ ネ

1 苗立枯病

（1）病原菌の多くは土壌生息菌である。山土や水田土壌等を使用する場合は、床土のpH を4.5～5.0に調整し、は種前に粉剤の床土混和を必ず行う。

（2）低温、多湿に経過するとピシウム属菌、高温、多湿（特に出芽時）ではリゾープス属菌による苗立枯病が発生しやすくなる。育苗中の温度管理に注意し、出芽後は10～30℃の範囲で管理する。特に、トンネル育苗では外気の影響を受けやすいので、日中の高温や夜間の低温に注意する。

（3）出芽後はこまめに観察し、カビを認めれば直ちに登録のある農薬で防除する。菌の種類により効果のある薬剤が異なるので注意する。

2 もみ枯細菌病（苗腐敗症）

（1）病原細菌は種子伝染するため、塩水選ともみ枯細菌病に登録のある農薬を用いた種子消毒を必ず実施する。

（2）出芽時の温度は30℃ を基準とする。ただし、加温しない育苗は10～30℃の範囲で管理する。

（3）発病苗を植付けると本田で腐敗し、欠株となるので、発病した苗箱の苗は使用せず処分する。

3 苗いもち

（1）種子伝染がいもち病の主要な伝染経路の一つであるため、健全な種子を用い塩水選と種子消毒を必ず行う。

（2）前年の稲わら、もみがらは有力な伝染源となるので、育苗場所の周辺には置かないようにする。

今後注意すべきその他の病害虫等－Ⅱ

イ ネ

4 種子消毒について

（1）温湯消毒を行う場合は必ず乾籾を用い、**処理温度と時間を厳守**するとともに、処理後は速やかに水で冷却し、直ぐに浸種・催芽を行う。また各機種の使用上の注意事項を遵守する。

5 スクミリンゴガイ（ジャンボタニシ）

（1）苗を移植する前に、**田面を細かく耕うん**し、越冬した大きな貝を殺す。

（2）水路からの侵入を防止するため、取水口に9mm目合程度のネットなどを設置する。

（3）耕うんや代掻きの時に農業機械がほ場間を移動する場合には、機械に付着した貝を移動させないように、都度洗浄を行う。

（4）前年の被害が大きかったほ場に移植する苗には、箱施用剤を使用する。

果 樹

1 ブドウ 灰色かび病

（1）発病適温は23℃前後で、開花前に雨曇天が続くと、突発的に発生することがある。

（2）開花前からハウス栽培では換気に努め、予防散布を徹底する。

（3）果粒に付着した花がらは、速やかに落とす。

野 菜

1 ネ ギ べと病

（1）４月中旬現在、発生量が例年比やや多くなっている。

（2）平均気温が15～20℃で降雨が多くなると、病原菌の活動が活発になるので、本病の発生には十分注意する。